

スペイン革命におけるCNT (2)

ホセ・ペイラツ

今村五月記

第1章 ベリヤス・アルテスの会議から プリモ・デ・リヴェラの独裁まで

一九一一年九月八日（スペイン全国労働連合（CNT）の誕生）以前から、全国的な形の革命的労働者組織をつくるにふさわしい空気がすでに存在していた。老いたる第一インターナショナルスペイン支部は、労働者の心の中から消えないでいた。実際、アナキズムに指導された革命的労働者組織は、CNT結成直前の期間、時間的、場所的に若干の間をとりつつ存続したのであった。

一九〇九年のバルセロナ事件〔モロッコでの戦闘に反対して起きた無組織な暴動とその結果の苛酷な弾圧〕は、スペイン全労働者の団結行動の必要性を痛感させ、全国に分散している力をつなぎあわせようとする願望を強くした。しかしながら、モントフィチ城の銃殺を頂点とする恐るべき弾圧、「悲劇の週間」の直接の打撃が、連合の結晶化を遅らせた。

いわゆるベリヤス・アルテスの会議は、一九一一年九月八、九、

一〇日にカタロニアの首府に召集され、スペイン全地方の代表者が多数集まった。会議の記録や議事録は、決議のうちのたった一つが招いたきびしい弾圧のためにほとんど残っていない。その決議というのは、モロッコの虐殺に抗議し、ビルバオ密鋳所のスト参加者への連帯を誓約して、スペイン全土にゼネストを宣言したものだ。CNTはその革命的活動を、スペインの軍国主義とその支配性との戦いにおいて街頭に出ることから開始したのである。それはCNTに当然の帰結をもたらした。一九一四年までCNTの合法的活動の権利は獲得されなかった。

第一次世界大戦は、カタロニアのような工業地帯のプロレタリア階級の感情を刺激した。連合国側の戦線への軍需産業向けの労働力需要は、すぐに二つの結果をもたらした。興隆する資本主義の野望とそれに続くプロレタリアートの権利の要求と、組合運動は民衆の心を捕えた。悲惨な賃金問題の他に、生活物資の値上りの問題があった。そして、この二つの問題がくり出す興奮を利用して、共和

主義諸政党や社会党やマルセリノ・ドミンゴの急進社会党は思惑をねった。すさまじい革命的雷鳴とともに布告されたあの「議員集会」は、政府のたった一つの命令で平和的に解散されてしまった。この話は、政治指導者に対する労働大衆の信頼を台なしにした。従ってCNTのサンディカリズムはその非政治的イデオロギーを明白にしたのだった。饒舌のレールスも含めてほとんどの共和派首脳の裏切りは、スペイン国民の最も団結した運動の一つであった一九一七年八月のゼネストで頂点に達した。刑を受けた政治指導者らは、翌年の憲法制定選挙のために与えられた特赦によって自由となり、その結果、彼らの多くが議席を得た。八月の運動における政治家たちの意図の信じるに足る模範は、議会の多数派に答えたインダレシオ・ブリエトの次の奮った言葉である。「国民に武器を与えることは確実である。しかし、弾薬を与えないということもそれ以上に確実である」。

（一）当時の経済事情悪化のため、CNT、UGT二労働組合は攻勢的協定を結んだ。その表明が、一九一六年一月八日、成功裡に遂行された二十四時間のゼネストと、一九一七年八月十七日に起きた言いようのない、革命的な性格のゼネストであった。

政治家の権威の失墜は明らかとなった。労働者大衆は議会主義の泥沼から脱出しはじめ、同時に彼ら自身の能力をも発見していた。

その年のもう一つの出来事が労働者の精神を煽りたてた。ロシア革命のクライマックスであった。イベリアのプロレタリアートは心からの熱狂をもってこの事件を祝った。

サンスの地方会議（一九一八年七月）は、組織の成熟の新段階を画

した。単産組合が作られ、同一系統の種々の組合が包括され、地方別全国委員が任命されて、彼らはCNTをコメディアの集会へ導いていった。サンスの会議の最も重要な決定の一つは、スペイン全土に宣伝のキャンペーンを張ることだった。このキャンペーンの多くの行事が、地方会議や農民会議と合流した。CNTの優れた弁士たちが半島の津々浦々まで巡回し、その結果、多くの組合や労働者連盟がCNTのブロックに加盟した。この加盟勧誘の成果は非常に有望だったので、政府はそれを挫く必要を感じ、活動家を多数投獄した。この手段は十分とは思えなかったが、組織自体は再び姿を消し、新聞紙上からは抹殺されたも同然となった。労働者は抵抗した。数週間後には有名な「カナダ工場」〔正しくはリエゴス・イ・フェルサ初カナダ人の資本であつた〕の労働者のストが計画されたが、それは、CNTのプロレタリアートによって最もよく組織され、かつ世界でも最もよく組織されたストライキの一つであった。

一九一九年は、カタロニアのアナルコサンディカリズムに一頂点をしるした。カタロニアだけで連合組織は五〇万人の加盟者を数えた。ブルジョア階級は驚いて、市民権によって悪事を庇護された職業的な殺し屋の部隊を動員して戦いをしかけることにした。闘士パブロ・サバデルとホセ・カステイリョは金で買われた弾丸の最初の犠牲者である。だが、工場主の策謀はさらに広範囲に及んだ。カタロニアの労働者のおびただしい数のストライキへの回答として、同年一月には工場主のいわゆる「ロックアウト」が行なわれた。「ロックアウト」は四週間続いた。しかし、CNTの組合証を引渡すことと団結権を拒絶すること、及び解雇の際に法律で定められた事前の八日間を拒絶することを執拗に主張する工場主への抵抗とし

て、労働者側からのストライキの形で一二週間（一〇週間目には著しくエネルギーが低下していた）延長された。この闘争は二〇万以上の労働者に影響を及ぼしながら労働者階級の恐るべき敗北となつて終わった。闘争のかかる状況の下で、コメディアの集会と呼ばれるCNTの会議がマドリッドに召集された。この会議には、七〇万以上の加盟者を代表する四五〇人以上の代表者が出席した。

この会議の決議のうち、特に触れておくべきはCNTの原則に関するものであり、以下の通りである。

「会議に対し、——万国の労働者組織の中心において最も力強く表明されているところの傾向、すなわち、道徳的、経済的、政治的秩序における完全絶対なる人類解放への歩みを熟知し、かつ、この目的は、土地と生産及び交換手段の社会化と、国家の絶対権力の消滅がなされぬかぎりには達成されぬであろうことを考慮して、ここに署名する代表は本会議に次のことを提案する。すなわち、労働者の第一インターナショナルの基本に則り、スペイン全国労働連合が追求するべき目標は無政府主義の共産主義であることを宣言する」

この提案には、ホセ・カネラ、エウセビオ・C・カルボ、サツルニノ・メカ、パウリノ・ディエス、アントニオ・フラド、エンリケ・サラリエイ、シモン・ピエラ、マテオ・マリネ、エンリケ・アパレシオ、ディエゴ・ラロサ、ヴィセンテ・バルコ、エミリオ・モリナ、アンヘル・ペスタニャ、ファン・ホセ・カリオン、エミリオ・チヴィネリョ、ロマン・コルテス、マウロ・バハティエラ、全国委員会、及び他の代表が署名した。

原則が宣言されるや、会議は闘争戦術に関して次の見解を採択し

分子も招請されたにもかかわらず出席しなかったことは、我々の思想と我々の統一の希望とに対する不同意の表明である。それ故、これ以上「無駄な」会議を開くことは無用である。彼らが我を説得し、彼らの思想を採用させることは必要ない。以上によって、会議は、連合がスペインの全労働者に向け声明書を作成し、加盟のため三カ月の猶余を与え、加盟しない労働者に対して、非組合員であり、労働運動の局外者であることを宣言するよう提案し、要請するものである」

会議は、ロシア革命とそれから派生した第三インターナショナルへの加盟の問題に直面しなければならなかった。ロシア民族の偉業は全世界の労働者を震撼させ、世紀の慶事として祝福された。スペインの労働者、なかならず全国労働連合は、資本主義の暴虐から人類の完全な解放を旗印に掲げたばかりのときであり、この事件を前にしては力のかぎり感動せざるをえなかった。しかしながら、この興奮の中にあつても、分析力と予言の声を失うことはなかった。このとき、エレウテリオ・キンタニリャは、この問題に関し次のように声明した。

「ロシア革命は我々の理想を体现したものではない。社会主義的性格の革命と考えられます。その方向と指導は労働者の参加ということに一致せずして、政党の参加に一致するものであります。中欧諸民族がロシア民族を包囲絞殺するのをし止めようとしても、そのためには世界の他の労働者との了解を求めなければならない。だが、私は第三インターナショナルの政策を尊重するので、CNTが第三インターナショナルに代表を送らぬ理由はないと考えかつ信じるのであります」

「会議は、プロレタリアートの統一が、以前用いられた旧式な方法を排し、直接行動に基づいて行なわれるべきことを確認する。バルセロナの「合同委員会」を批判する。しかしながら、カタロニア地方委員会によってなされた宣言に満足すべきことを全体に勧告する。この宣言において同委員会は誤りを認め、連合の称揚する行動手段に従って常に戦うことを約束した。同様に、野にある労働者の労働条件を規制するために政府が告示したあらゆる決定と条令、労働者階級をしてその解放への直線からはずれた子供だましの余興で分断せんとする条令を拒絶すべきことを勧告する。書記局は、対資本闘争の武器としてサボタージュを採用する必要性を痛感する。しかし、この手段は聡明に、かつその使用が、必要、適時、有効と考えられる場合に限り行使されるべきことを勧告する」

会議の日程に、UGTとの統一に関する点が含まれていた。代表団の中には、アストゥリアスのように、組合の両中心の合同を強く主張するところもあった。討論の末、バルセロナの作成した次の提案が採択された。

「CNT及びUGTの理念と戦術は全く対立し、双方の理念と戦術とはすでに完全に決定しており、かつそれ故に周知されるべきところであることを考慮し、ここに署名する組合は、二つの組織の合同に向かうべきでなく、同盟（UGT）を構成する労働者の吸収に向かうべきであると考ええる。第一、CNTはUGTの三倍の加盟数を代表している。第二、先に述べたとおり、連合（CNT）のあらゆる思想と戦術は周知のところであり、本会議には同盟の

しかし、会議は宣言として次の結論を採択した。

「全国委員会は、上記の問題に関して、今日これに触れた多数の演説者の表明した意見の結論として、提案する。一、スペインのCNTは、バクニンに支持された第一インターナショナルの原則を断固防衛することを宣言する。二、伝えられるところの革命的性格により、コミンテルンに一時加盟する。しかし、スペインのCNTは、真の労働者インターナショナルが従うべき原則を決議決定する世界労働者会議を組織召集する」

会議が終わるや、カタロニアのプロレタリアートの受難が激化した。ブルジョアジーに雇われた殺し屋が労働運動のすぐれた指導者を射った。勇敢で英雄的な返答は、工場主や警察の攻勢を、社会的暗殺の極にまでつづらせた。カタロニアのCNTは、明らかに不利なこの戦いで甚大な痛手をこうむった。だが、地方では、連合の運動は基盤を獲得した。そして、この絶え間ない流血の悲劇的情況の中で、サルヴァドル・セグイが、マドリッドにおいて労働者総同盟（UGT）と協定を交渉した。一九二〇年暮の大会は満場一致でこの協定を否決した。しかし、既成事実として、社会主義指導者の善意を試みるチャンスを与える決定がなされた。あたかも、リオチントの鉱山ストライキが計画されていた。CNTは、UGTに対して、この闘争に統一のゼネストで共に立ち向かうと呼びかけた。社会主義に指導されるスペイン全土の鉱山労働者と金属労働者は戦端を開かねばならなかった。社会主義者は尻込みして、代償に穩健な解決を提案した、結局、リオチントの坑夫らは四カ月の闘争に終止符を打たなければならなかった。

一方、暗殺の波は広がった。闘士ホセ・カネラの暗殺に続いて、一月三〇日にはCNTの弁護士フランシスコ・ライレトが暗殺された。三一日にはサルヴァドル・セグイを含む三六人のすぐれた連合の闘士がモラ（マオン）に追放された。バルセロナでゼネストが宣言され、やや遅れてスペイン全土に宣言された。UGTはストに加わることを拒んだ。組合の統一協定は、両組合の中央によって破棄された。CNTは単独で冷酷な弾圧に対抗し続けた。反動勢力は、暗殺の挑発に対し、エドゥアルド・ダト、ソルデヴィラ枢機卿、サルヴァティエラ伯爵その他の首をもつて応じた。

そして紛らわしいことに、モスクワの独裁に加担する者たちは、連合の職務に据わり続けた。コミュニストによって開かれた一九二一年四月のレリダ大会では、アンドレス・ニンとホアキン・マウリンがロシアへの代表に任命された。その後のログロニヨの大会では、この代表団は否認された。サラゴサの全国大会（一九二二年六月一日）がこの点に最後の結論を下した。ロシアから帰ったばかりのベスタニャが大会にソヴィエト独裁の実情に関する報告を行ない、組合によって査証されるべき決定によって、モスクワの勢力圏からのCNTの分離が承認された。にもかかわらず、革命的インターナショナルの新しい中心に連合が加盟するのを許可するために、当時召集されていたインターナショナルの設立会議に参加することを確定した決議が採択された。

続く数カ月は、プリモ・デ・リヴェラの軍事的プロナンシアメント（反乱宣言）まで、バルセロナの地下鉄及び輸送のストライキのような大ストライキに費され、後者はスペイン全土の交通に大きな反響を与えた。独裁は、実際すっかり出血しつくしていたCNT

の中から募った傭兵には頼らないで、全員で協力した。ブルジョアジー、僧侶、軍人、警察長官や検察官、民政長官、工場の支配人、郊外の穏和で用心深い人間、王党派、警備隊員、一連の国際的冒険者が、白色テロの絵をいろいろとった。

時とともに、フランコ・フアランへ主義の恐るべき罪悪は、似かよった汚名の同類を見出すようになる。アリバイ工作や暴行が平然と画策され、しかも実行された。弾圧は、カタロニアの第一級の権力者の直接の煽動をたのみとした。その中に、守備隊の総司令官（ミラン・デル・ボッシニ）、民政長官（マルチネス・アニド）、警察長官（アルレギ）がいた。その活動費は工場主連盟によって長い間支払われていた。

「逃亡法」の適用はこの期の典型的な手段の一つだった。逮捕された者やただの留置者が真夜中に牢から引き出され、逃亡を企てた隙で、卑劣にも監獄のすぐ傍で殺された。連合の闘士狩りや市街での暗殺が、白紙委任状をもった殺し屋によって白昼遂行された。犠牲者は数えきれない。ここに不完全なリストがある。

「ファン・アレマニイ、ラモン・アーチス、ホセ・アイカルト、ホセ・アイメリヒ、ベニト・パイロ、ラモン・バタリヤ、ミゲル・ベルトラン、エヴェリオ・ポアル、マヌエル・ベルメホ、ホセ・カルドゥフ、パブロ・サパテル、ホセ・カステイリョ、ホセ・カネラ、アグスチン・カネト、アウレリオ・セルデリオ、エミリオ・セルヴェラ、ホセ・クラモンテ、ラファエル・クリメント、アルベルト・イ・アントニオ・コール、アンヘル・コロミナス、ホセ・クリストバル、ハイメ・クルサト、エミリオ・デスブラ、ホセ・ドミンゲス、ホセ・ドゥホ、ハイメ・エスピノ、ホ

の組織活動を麻痺させた。

だが、いくつかの面を詳述しないでこの章を終ることはできない。我々は歴史のために、と同時に将来の戦う世代を啓発するために書いているのだ。そのためには、誤ちは、多かつたし、労働者自身が犯したのだが、いかなるものも沈黙の裡におくことはできない。

その一つは、繰り返すのも痛ましいが、強いと信じられていた団結（CNTは一九一九年から一九三三年までの間、事実そうだった）が逆境における独自の能力を誤認したことにある。CNTはカタロニアだけで五〇万の加盟者を獲得したと計算される。この割合は、闘争と犠牲の覚悟のできた活動的分子の中でも同じ数を示していたのではない、全くそれどころではなかったのである。しかも、何度もこの幻想的基盤から出発したのである。一方、初期の勝利が過度の熱狂を呼びおこし、伝染性の危険な自惚れにまで陥った。

反動的血統のスペイン国家が、労働者を公道の実際の所有者と認めることはできなかったろう。興隆するブルジョアジーは典型的なエゴイストで非妥協的で、商売を脅かし快適な消化を妨げる邪魔物は決して許さなかった。従って、労働者の抵抗が強ければ強いほど反動が残忍であったのは当然である。組合現場のごく少数の洞察に富むものは、過激で、興奮して、自給的である大多数の活気を抑制するのは不可能だと感じた。最悪の条件の下で挑発にのるというひどい誤りに陥った。関与した挑発の個々の事情は斟酌しても、虚勢や極端な暴力行使を示すこの種の集団的虚栄に屈してしまった。そして、多分あらかじめ準備されていた回答は、他日待つまでもなかったのである。そこでは「秩序」の執行者は、無法者や労働者自身

セ・ペレス、ホセ・エストラダ、グレゴリオ・フェベス、アントニオ・フェリウ、ハイメ・フィゲラス、ホアキン・フォルツニイ、ファン・フィゲロラ、ホセ・ガスパー、ロセンド・ヒメネス（新聞記者）、ラファエル・ヒロネス、ラモン・コマル、ミゲル・ガルシア、ヒラリオ・フェリペ、ファン・イラガリ、フランシスコ・ジョーダン、ヘルメネヒルド・ラタサ、フランシスコ・ライレト（弁護士）、ファン・ロベト、ミゲル・ロパルト、リカルド・ピ、ヴィカリオ・ピフェレル、フェリクス・ロサノ、ミゲル・マス、ホセ・メレンデス、ベニト・メナチョ、ホセ・ピケラス、ロレンソ・プラナス、ホセ・ブラネリヤス、ホセ・プラデス、ホセ・メストレ、エンリケ・ミゲル、ラモン・ミロ、ペドロ・プエジョ、アルフォンソ・ペイロ、フランシスコ・ラフォルス、ペドロ・ラモス、ドミンゴ・リヴァス、ホセ・モンクルス、ホセ・モントセラト、ホセ・パヘス、ホセ・パラウ、ホセ・リエラ、パウチスタ・ロカ、アルマンド・ロデナス、ラモン・パネリヤ、ハイメ・パラ、ヘスス・パラド、ハイメ・ルビナト、ハイメ・モリンス、アントニオ・サムベル、フランシスコ・サンス、ホセ・ソラノ、ラモン・ペリス、ホセ・ソレル、ディエゴ・スピラ、アグスティン・スピラス、アルベルト・トロン、ハイメ・トレスカサナ、ペドロ・ヴァンデリオス、エヴァリスト・ヴィラプラナ、ファン・ヴィラスエヴァ、アンドレス・ヴェンツラ、ガスパル・アロス、フェリペ・ヴィセンテ、ホセ・リヴェロ、ファン・リウス、ハイメ・カレリヤル、ファン・ソラナス、フェリペ・ヒメネス、サルヴァドル・セグイ、ファン・ペイ、フランシスコ・コマス、モイセス・プスタメンテ、ラファエル・ギラウ、ラモン・ヒ

ル、ペドロ・マルチ、ホセ・ギタルト、アルフレド・ゴメス、ハイメ・アルベリシアス、等々」

次は重傷を負ったもので、多くは後にその傷がもとで死亡した。

「クレゴリオ・アムプロシオ、ゴンサロ・バルセロナ、アントニオ・バルゲス、ファン・バラチ、ハイメ・バルト、フランシスコ・ブラヴォ、バウデリオ・ブルドイ、アンドレス・カブレ、セバスチアン・カナルス、アグスティン・フロル、エミリオ・フェルテス、ハイメ・グラス、ホセ・エルナンデス、ラモン・リョベラ、オレガリオ・ミロ、フランシスコ・モントリオル、ルイス・オリヴェラス、フリアン・デ・ペドロ、アンヘル・ペスタニャ、マヒン・パラウ、エリアス・ケル、アントニオ・エリアス、ホセ・トレス、ルイス・ツバウ、ホアキン・ヴィララサ、ペドロ・マサニ、フランシスコ・ヴィスカイノ、ファン・ハイメ・ヴィネト、アントニオ・ボレア、レオン・ボルテト、ファン・クシ、ハイメ・ラモン、ディエゴ・パラ、ホセ・ガリゴス、ディエゴ・イ・ルイサ・バランコ、ラモン・サルヴァドル、ファン・セルヴェリヨ、マヌエル・サルヴァドル、ヴィセンテ・マルチネス、ホセ・リヴェロ、ハイメ・フォイクス、セバスチャン・ヴェラ、等々」

三種類のいとおしい人間が周囲を圧している。民政長官、スパイ、殺し屋。第一の部類には、最高位に置かれた三「高官」が属する。カトロニア軍団司令部と、市庁と、警察の最高職で、組合で活動していたスパイの示したところによると、挑発や暴行が謀議されていた。あのラサルテの整理棚が独裁崩壊後発見され、汚れた謀略の全貌が明るみに出た。ホムスやフェセドのようなスパイ、サレス

チン、ペレス、ドミンゲスその他のアルレギの手下に援助されていた。

ピタはアルレギの命令で日付と住所を伝える係りだった。警官と殺し屋に守られていて、名前の登録と逮捕と暗殺をやった。この仕事は、アルレギが、ミロ、トレバト、ムンタダスから渡された金で支払った。一件片づくたびに、ラギアが、スピラナ、マルサ・セルト外の雇主から徴収した。これらの金は、サレス、ラギア、ロレンソ、マルチネス、アンセルモ・ロイ、マルコ・ルビオ、アントニオ・オリヴァレスで構成される実行委員会のメンバーの間で分配された。

オノリオ・イングレスがその命令をアンドレス・オルネト、ラモン・ロデナス、ミラリエス、カルロス・バルドリヒ別名オネロに伝えた。彼らは、「逃亡法」、登録、逮捕を行なった。イングレスはイスパノ・スイス会社で雇われて働いていた。ピタは、警察長官に殴打されるべき人間を決定し、アルレギが行なう尋問に立会った。この二つはつまり同じ事である。

ラサルテは事実マリリオスの片腕だ。その命令を警官のマルチネスや他の警備隊員に伝える。逮捕、登録、「逃亡法」の実施があるときは、その日付の確認、暴行が仕事である。フェルナンデス・ヴァルデス少佐に助けられている。彼らは「金獅子」にたむろしていた。ここは、いつもくわえパイプの警備隊員が出入りしている、一手引受人の一人から受取った秘密情報をスパイに流している。この人物についていけば、諸君に極めて重要な多くのことがわかるだろう。ラサルテの身上については知らないが、街頭で見抜くのは簡単だ。私は奴の友だから。ラサルテは、私の

やラギアのような殺し屋は、当時の汚名で腐っている。中には後悔に責めさいなまれて、ついにセンセーショナルな暴露をした者もある。イノセンシオ・フェセドの話に出てくるのは次の者たちである。

「マルチネス・アニド(民政長官)はサレスやラギアと働いた。犯された暴行を値踏みしていた奴だ。あるものはアルレギ(警察長官)が支払った。ライレトについて、アニドは、スペイン工業社のムンタダスが渡した四万ペセタを支払った。ペスタニャについては、金額は不明だが、やはり相当の金が渡っている。殺し屋は「青い」身分証明書を帯行していて、暴行を犯して追及されるような場合、それを見せるだけで釈放された。

暴行の多くは、アルレギが任命した警官がその逃げ道を確保してやった。エスカルチン、マルチネス、ペレスがいる。彼らは、「逃亡法」の行使とか、何かの罪で拘留するとか、住居登録を行なうとかの場合に公安官の助力を必要とするとき、帯行している証明書に従った。

サレスは暴行に金を分配する係りで、犠牲者の写真を持っており、ときには自分でもやった。ホムスは殺し屋の犠牲になるものを「マーク」する係りで、その愛人の「田舎娘」は判決を下された人間が家を出るのを知らせた。「左翼酒場」にはいつも誰か殺し屋がいて、「田舎娘」がマークした人間が家から出るのを見張っていた。ホムスはアルレギと接触をもたなかった。アニド以外は誰も知らなかった。

サレスとラギアは、殺し屋たちが「逃亡法」を行なうためにアルレギのところによこしたもので、アザビト・マリン、エスカ

立会いなしで諸君に危害を加えるために呼びつけられている。

カルメン・オリヴェラ(オリヴェラ、五(原文のまま)、グラシア)は説教者。殺し屋を逃がすのに必要な仕事をする係り。フォイクスの件で重要な役目を果たす。偽りの証言をした。

グロリア。サン・アンドレスの組合の理事。殺し屋の保護者で、家を隠れ家に提供している。いくつかの暴行事件の武器運搬人だった。

サントロというあだ名のマルコス・ルビオの女房は、殺し屋の武器を運び、実行時間を指示した。

ディオニシオ・マルチンの居場所は知らない。ドミンゲスはマドリッドのメディオディア駅で列車部門の仕事をしている。マドリッド発の快速が急行に乗ることになっている。カセタス・ペレスも同じ仕事をしている。マルチネスはラストレに雇われている。オノリオ・イングレスは軍を追放されてオランにいた。

ピタは治安局にいる。アガピト・マルチンはセヴィリヤにいる。他のほとんどはアルレギがマドリッドにつれてきた。

ライレト。アルレギ、アニド、マルチン、サレス、ラギアがこの暴行を計画。ムンタダスが支払った四万ペセタが提供された。ホセ・コンカ、アルヴァラド兄弟、カルロス・ヴァルドリヒ、フルヘンシオ・ソリアが一役買った。奴らの逃げ道は警官が守っていた。最切の一発は、「ライレト」と叫ぶと同時にソリアが射った。ライレトといっしょに女がいたと思う。ソリアの声を聞いたはずだし、ソリアが胸あてズボンに黒服だったのにも気づいていたはずだ。背は低い。

セグイ。雇主と「エル・リブレ」が計画した。カルロス・ヴァ

ルドリヒ別名オネロ、マヌエル・シモン、アマデオ・ブフが参加。ファン・トレンス、ホームズ、サレリと呼ばれるパン屋の小僧が手を貸している。この暴行はサレスが高く値をつけている。

ボアル。警察署でアルレギと他の部下が計画し、サレス、ルイス・カルデロン、テハダがやった。テハダは、ボアルが倒れるとすぐ死んだかどうかをみこんでみて、虫の息のボアルから平手打ちをくらって眼鏡を割った。かけらが眼に入った。

ベスタニャ。ヴィニャルス、ファン・デ・ラ・マンタ、カルロス・ヴァルドリヒ、ラモン・ロデナスがやった。ベスタニャは負傷して倒れる前に、誰かが「お前をねらっていた」と言ったのを覚えているはずだ。次の瞬間射った。そいつがヴィニャルスだ。暴行の後、ヴィニャルスとロデナスはバルセロナへ逃げた。汽車の中でロデナスはピストルで撃たれ、片足を負傷した。傷は秘密裡に治療された。ロデナスは仲間の暴行の犠牲者で、傷は医者で治療をうけた。彼を診た者をみな調べれば、誰よりもよく診てやった者がいたのがわかるだろう。私が留置場にいたとき、奴は叔父宛ての手紙を二通私に書かせた。その中には、多少の差はあるが、証言するために呼ばれたら、この事件が起きたとき彼は家にいたと言えと書かれた。ロデナスという姓の目撃者を捜せ。

ヴァレンシアから来ている。多分そいつの甥の手紙が見つかるだろう。この仕事はアニドが金を支払った。

トマス・エレロス。ホセ・シンカ、カルロス・ヴァルドリヒ、マヌエル・ナヴァロ、レオン・シモンがやった。エレロスを調べれば、彼の本の屋台店に誰かが近づいて本を見はじめ、値段を聞いたと答えるだろう。すぐ後で一人が一冊買って一ドゥーロ渡

し、同時に紙に巻いた短剣を引き抜いてねらいを定めて一突きした。すぐにランブラ通りを上へ逃げた。奴は背が高くてやせている。エレロスが注意していたと思う。いつものように黒か緑の眼鏡をかけていたかどうかは知らない。レオン・シモンだ。サレスがそのために三百ペセタ渡した。

フォイクス。ハイメ・フォルト、サレス、ホルスが計画し、ホセ・コンカ、マヌエル・シモン、フルヘニオ・ヴェラが実行。彼らは大学広場において、ホームズ、フォルト、警備隊員トレンスが「左翼酒場」でフォイクスの通りかかるのを待った。フォイクスが仕事の帰りに通りかかったとき、ホームズがフォルトに「合図」して、フォルトが彼を尾行し、今度は殺し屋に「合図」した。ヴェラが路地の奥に身をひそめてピストルを射ち、彼を殺した。ホームズと他の全員が殺し屋の逃亡を助けた。この暴行は、銀行・証券会社団体のハイメ・フォルトが金を支払った。

マネロ。ホームズ、トレンス及び「エル・リブレ」が計画、ハイメ・シンカ、カルロス・バルドリヒ、マヌエル・シモンが実行。ホームズがあまり近くから殺し屋に合図したので、マネロはそれを聞いたに違いない。彼は振り向いた、同時にシモンが銃を突きつけて発射した。それは的中しなかったで、他の者が続いて射った。その弾が彼を決定的な死に至らしめた。同じく「銀行」によって金が支払われた。

サルヴァドレトとアルブリシアス。「エル・リブレ」、ホームズ、トレンスが計画、シンカ、バルドリヒ、サレス、マヌエル・シモンが実行。彼らはグラシア街において、そこでホームズとトレンスが指示した。

カナラ。アルレギと「エル・リブレ」が考案、サレス、シンカ、アルヴァラド兄弟が実行。

クルサトとカナルス。「エル・リブレ」が考案。フルヘニオ・ヴェラ、A・コル、A・オリヴェラス、パウリノ・パリヤスが一役買った。この暴行は、他と同様、アニドとアルレギが金を払い、後で「エル・リブレ」が雇主から徴収した。「エル・リブレ」はミロとトレバト、ムンタダスとリヘその他に金を支払うために任じられていた。

ペイ。「王党隊員」がトレンスとホームズと合意の上で計画、彼らが「合図」した。ベルトラン、プエンテ外が参加。全員カルリストの警備隊員。この暴行では三人消されることになっていたが、例によって一人だけが死んだ。

ベスタニャ。ムンタダスは彼の死と引きかえに「エル・リブレ」に二万三千ペセタを提供した。「エル・リブレ」は次のように計画した。ベスタニャのバルコニーのちょうど前にもう一つバルコニーがあつて、ベスタニャは自分のバルコニーから外を見る習慣があつたから、サレスは手を伸ばせば殺せるほどだと考えた。そのために、彼は百ペセタの報酬を与えて、向いのバルコニーのある階を空けさせた。

短銃がなかったため、あるいは、ムンタダスが、サレスに渡さないで、この暴行を実行する者に金を渡そうと言ったために、これは実行されるに至らなかったらしい。

レウスの事件。警察署、市庁、レウスとフェリサの工場主の共同謀議。フルヘニオ・ヴェラ、ニカノル・コスタ、パウリノ・パリヤス、アルヴァラド兄弟が参加。彼らは捕えられていたが、彼

らを監獄から逃がすようバルセロナで命令が与えられた。レウスから菓の荷車に隠れてタラゴナに行き、この村からバルセロナに行った。アニド、アルレギ、フニエン、王党派隊員の主要人物、例えばレウスの工場主らが敢行。これらの実行者のうち、フルヘニオ・ヴェラだけが逮捕された。パリヤスはサラゴサの電車の検査員である。コスタはバルセロナ市役所において、アルヴァラドは凱旋門広場に「金獅子」の主人から贈られたいい車をもっている。この事件ではレウスのモザイク工場主が重要な役目を果たしている。名前は知らないが調べるのはやさしいと思う。

トレス・リトス通りの事件。マヌエル・シモン、ホセ・シンカ、カルロス・バルドリヒ、カサス・ロウラ、プエンテス、サレス、トレンス、他の警備隊員が参加。

ホームズについては、過去は不明だが、現在ではわかる。内務省に雇われていて、マドリッドの進歩的な部隊とバルセロナから来た部隊を見逃さないことが任務だ。パリオペロの件に移る。パリオペロは身を守るため旅行を考えていたが、判断がつかないままにいたとき、一度カルメン通りで殺されそうになった。それで、その日のうちに急行でマドリッドに行った。ホームズは、カロマルデともう一人慈善病院で働いていたものを「マーク」した奴だ。今ホームズはアゾアナ通り四番地の本拠に住んでいる。

(1) これらの暴露は、フランスに移ったアナキストの機関紙「パリ・テンプス・ヌエヴ・オス（新時代）」の中で、一九二五年春、すなわちパリオ・デ・リヴェラの完全な独裁の時代に、公にされた。内務大臣は当時マルチネス・アニドだった。

第二章 軍事独裁から第二共和国まで

無責任な批評家たちは、一九二三年九月一日のCNTの自滅「プリモ・デ・リヴェラ將軍の独裁が成立する」を云々することに関心があつた。一九一九年から一九二三年まで注意深く冷静に連合の労働運動の受難に従ったものならば、CNTの消耗が、エネルギーにおいても貴重な生命力そのものにおいても甚大だったことを認めざるをえないだろう。野蛮な軍事独裁の影響を考へるなら、軍事政権の絶頂時であつて、軍人の間でCNTの運動が沈滞していた現象は当然以上だったと考えられる。だから、白色テロのために血を流し、滅亡の危機に瀕していたCNTが、ムッソリーニのファシスト的計略である労働同数と呼ばれる仲裁団体の体制に屈しようとしなかったと言へるのではないか。

CNTはそのイデオロギー的特質を捨てるか、合法性の枠を破るかのジレンマに直面した。一九二四年バルセロナ裁判所の死刑執行人の処刑を機に、待ちかまえていた軍閥支配者の攻勢の幕が切つて落とされた。CNTの活動家に対する追及は残酷だった。彼らの多数はピレネーの国境を越えてフランスへ亡命したが、国境では独裁に追われる者がみな列をなした。しかしながら、同年、ピレネー越えの暴挙、ビダソア海岸の流血事件が起きて、パンブロナとバルセロナのアナキストの主謀者数人の命を犠牲にしたのだった。

ビダソア海岸の事件は、一九二四年一月の六日から七日、すなわち軍事独裁の第一段階に起きた。最も明らかな事実は以下のようなものである。その日の前にバリ（反独裁の謀議の拠点）では、スベ

庭で行われた。

白色テロの時代がピストルの独壇場であつたとすれば、「サンディカリストのテロ」の始末を標榜する独裁は、恐るべき手続きと判決を破廉恥に持ちまわるとともに、何ヶ月、何年と続く予防逮捕の時代を開いた。監獄への道は六年の長きにわたり、坦々として続いた。

この恐怖時代の後半になるまで、左翼の政治家、市民、活動家との共同謀議の余地は全くなかった。労働者総同盟（UGT）の貴族証明書が恥じるほどの憶病さですら平穏な地はなく、しかも、CNTには相当の変節、ロシア共産主義に転じた活動家、昔日の革命的熱狂から冷めていった連中が出ないではなかった。ペイローベスタニヤ論争は、幸運にも一時的におわつたこの危機の最もまなましい記録である。次に引用する記事からよくわかるように、コメディアの会議で決定されたCNTの闘争方針からは明白に修正主義的な方向への一歩がふみ出された。

独裁の初めの四年間、活動家の仕事は間歇的な理論的作業に限られていた。カタロニアでは組合は閉鎖され、日刊誌「ソリダリダッド・オブレラ」（労働者の団結）が廃刊になったが、地方のいくつかの都市には存続の多少不安定な新聞があつた。我々の出版活動を証するものとして次のものが挙げられる。勢力を得た時代の順に、ヴィゴの「デスペルタッドノ」（目覚めよ）、サン・フリーュー・ド・ギゾーの「アクション・ソシアル・オブレラ」（社会労働運動）、ブラネスの「エル・プロドゥクトル」（生産者）、アルコイの「レデンシオン」（救済）、エルダの「オリゾンテス」（展望）。検閲は雑誌にはやや寛大だった。バルセロナの「ラ・レヴィスタ・ブランカ」（白

インが人民の革命運動に接近しているという情報を得た。スペイン人のアナキストグループは、情報の出所の本体を注意しないで、スペインに突入しようと国境へ数人の活動家を派遣した。国境へ着くや内部の情報をさぐるために連絡員を送りこんだ。この連絡員が遅れた、そして待機していた方は性急にも武装して六日の夜国境を越え、治安警備隊と衝突してしまつた。場所はビダソア海岸付近だった。この結果、警備隊側に二人の死者と、謀議者側に一人の負傷者を出した。そして、この情報が誤りか偽りであるとわかつたのでフランスに引き上げようとしたが、地理に暗い彼らにはきわめて困難なことで、一晩中歩きまわっていた。七日の明け方、ついに鎮圧部隊がまさしく本物の人狩りを決行し、反徒側に死亡二、負傷四、逮捕一九を出した。

パンブロナに招集された即決裁判所は、一件を普通裁判所にまわすことを決定した。が、ブルゴスの総司令官ブルゲテ將軍は判決を破棄し、代わりに軍事ならびに海軍最高法廷に送った。この判事もパンブロナの即決裁判の決定を支持した。ところが、治安警備隊の総司令官が職務がらこの事件に例の強烈な名誉本能をひきおこし、検事が辞職したにもかかわらず、独裁者をおして三人の反徒パブロ・マルチン、エンリケ・ヒル、サンティリヤンの死刑の宣告と執行を要求し、獲得した。パブロ・マルチンは執行人の目の前で通路の一番高い所から監獄の庭にとび下りて自殺した。

海岸のこの事件はバルセロナで反響を呼んだ。バルセロナでは、同じ頃、未遂に終わったアタラサ司令官突撃の計画があつた。逮捕された二人、リヤセルとモンテホは即決裁判に付されて最高刑を言い渡された。執行は同年十一月一日に同市のモデル刑務所の

色評論は多数の読者を集めた。バルセロナではまた「ヴェルチセ」（頂息、「イニシアレス」（先鋒）その他多数の書物が社会小説の形で現われた。ヴァレンシアでは、有名な「ヘネラシオン・コンシエンテ」（覚めたる世代）——後、「エストゥディオス」（研究）——が科学的・思想的普及と熱心な紹介を事として出発した。追放された活動家たちは、フランスで膨大な理論的・論争的な刊行物を出した。

バルセロナにも地方にも、油断なく偽装し、近隣の労働者グループに支持された合理派がいた。書物、雑誌、声明、巡回や旅行が秘密会合を伴って、陰謀と比喩の女神とへの崇拜とに結びつけられた。この比較的平穏な時代にはぐくまれて新しい世代が生まれた。

力の支配が崩れ始めると、活動家たちは国境を越えて、施行中の法律の庇護の下で多少とも自然に発生した職人組合の中心にいるいわゆる「組合の幹部」を激励するようになった。組合はなかったが、組合の地域連盟の、次に地方連合の下地ができて、最初の全国委員会が登場した。CNTは、一九二九年、ともかくも建設的な理論闘争の喧噪の中で息を吹きかえた。ファン・ペイローはアンヘル・ベスタニヤの日和見のサンディカリズムに対抗して、「アクション・ソシアル・オブレラ」に連の論文を公開して筆をふるった。ここに彼の「陣営の境界設定」の抜萃が少しある。

「……一九二七年半ばに、バルセロナのアルテ・ファブリの活動家集会で——なぜだったか今わからないが、私も出席していた——、ベスタニヤは、パリティ委員会（労働同数の代表からなる仲裁委員会）はCNTの原則と一致するものだと言明した。私がそんな断定に対して

激しい驚きを見せて反論したとき、ベスタニャは確かに「科学」という言葉を器用に使った。それでもベスタニャは、CNTが現在「抑圧され」かつ「自制的で」あるのを知っている私たちを警戒させるにはもはや十分に「内心をむき出しにして」いた。

「位置につこう」という言葉で、私たちは、「連合は抑圧されている、しかし自制してはいない」ということの大胆な肯定を表白している。それは、CNTは恒久的な原則の表明ではないという意味であり、いかに改良主義的であろうとも、あらゆる種類の原則に適應することができ、また、それ自身、「原則は人間が作るものだ」（神が作ると思える者があろうか？）そして「人間がそれを変更することができる、云々」ということとまさしく同一なのだ。

だが、そうではなかった。私は同志サルトルとその時及びその後のベスタニャ派のすべての者に言う。CNTの原則が変えやすく変わりやすいとするなら、それは、経済的・政治的・社会的発展の進行を、無意味に、また不可避の命令で告発するからではなく、反対に、CNTが基本的原則をもっていて、その本質の恒久性が絶対であるからなのだ。

連合の会議は変更の要ありと認められるCNTの原則はすべて変更することができる。だが、いかなる会議も、従っていかなる人間も、たといすぐれた「事実の認識」と「実践の精神」をもつていようと、できないことは、CNTの本質的基礎、存在理由たる原則、反議会主義と直接行動、を否定することである。

これまで述べたことは、次のことを承認することだ。今日、自由に、しかも正式の会議で話し合うことができるなら、変更可能

なものすべて変更されるだろう——会議や連合の総会などがいくつかに変更した——、しかし、CNTの基本的二原則、直接行動と反議会主義は、不可触の原則として根底に残るだろう。そうでなければ、CNTには存在理由がない。そして今、私は、CNTに存在理由を与えることだけを擁護する。

他の著名な活動家も論争に加わった。E・ネグレスコ（別名エウセビオ・C・カルボ）がいた。彼は「同志ペイローへの公開状」で言っている。

「結局、何のことなのか？ 誰や彼やをやりこめることなのか？ 恐るべき論客として有名を馳せるためか？ 否、ただ単に決定された行動を検討し、原則と一致しているかどうかを検査するということなのだ。原則が、決定された活動を有罪とするかどうかをはっきりさせるということなのだ。結局、労働運動の現実の必要性を解説する、つまり、もし一方で実践の基礎として役立つと、他方でその名目において実践を目ざす原則それ自体の否定になるということを経験する何かの方法が、見かけをよくできるかどうかを証明しようとすることなのだ。

直接的なこと、当面の問題、明らかにしていること、感情を害すること、要ははかない経済的実利主義にあるのだが、それは、最もすぐれた思考力のある精神だけが到達できるところの明日にも必要な収入への洞察を暗くするものである。かかるすぐれた精神には一個のパンは一個の思想よりも常に軽い。

その上、現在と未来の間に分割線が引かれている。私たちの夢みる輝しい未来は、それが妨げられずにはぐくまれる現在の裡にあるのではないのか？ 私たちが実際にそれを支援すればするだ

け、その成熟がすみやかなのではないのか？ 現在へ負わされた過去の不潔と誤謬と愚かな実践とは、未来を不滅に実現する基礎を固めるために応用されるのではないのか？」（『アクシオン・シアル・オブレラ』一九二九年一月七日）

この新聞の同じ号に、マヌエル・プエナカサは次のように書いている。

「忠実かつ従順なる一組織のために、また何よりもまず原則を守らねばならぬと考える他のグループのために語りたい。前者に対して私が沈黙することは軽蔑になる。この沈黙と軽蔑は一般の労働者も目にするだろう、そして、誰も戦列を増強せず、だから当然死滅するか卑怯にも坐食するだろうことは明らかである。CNTの原則を完全無欠に維持するであろう組織を守る者たちのために、私の全幅の親愛を送る。そして——つつましくはあるが——老いたる闘士として、それに関する助言と意見を与えることを許してほしい。ただ助言と意見だけを。

私はものの名称を変えようすることに賛成するものではない。従って、「組合の幹部」よりも、なければならぬのは組合であり、それぞれの連盟であると考ええる。CNTは、論理上、その母体たる組合の上だけに建てられるものである」

しかし、全国的規模で立ち現れた事件に移る前に、その事件では全国労働連合が重要な役割を負うのであるが、重大な出来事が我々に知らされた。スペイン及びポルトガルのアナーキストグループによるイベリア・アナーキスト連盟（FAI）の結成である。一九二七年、ヴァレンシアに召集された無政府主義者会議の決定と結果についてはほとんどわからない。一九三一年まではFAIはスペイン

の社会生活の中でCNTと結合して決定的影響を与えるようになるには至らない。

スペインの自由アナーキスト運動の本質を守るといふ健全な意図をもって結成されたFAIは、後に我々が迫るにいたる転向の危険に直面した。一九二九年一月付けの半島委員会署名の声明から次の文章を抜萃する。

「労働運動の中立性、及び、イデオロギー的指導と破壊的宣伝における組合の独立性を信じるということは偽りである。その解放の独自性と社会全体における否定しえぬ展開とは、いかなる形であれ、多少とも勢力を有して社会のヘゲモニーを争っているイデオロギーの影響を免れることを、——特に、その倫理的社会的目標が、自己の内部に参与する最も有能な少数者を作り出すことである場合、不可能にする。それ故、国際的規模において社会的政治的宗教的傾向と同様に多様な労働運動が存在するのである。

すべて労働運動はその本質が何であれ、資本主義的・国家的体制の命令であれ、労働者のおかれた政治的後進性と経済的不平等状態が起源であれ、直接行動がより良い物質と精神を獲得することとであれ、同様に他の社会運動が、抑圧されたものの経済的改善と現行の労働の人間化のみならず、悪質な雇傭を徹底的に焼き、経済的政治的特権を完全に消すことをも願って闘っているということをお忘れはならない。

ここから、CNTが、言葉の最も広い意味でその活動の画期的・破壊的たることを望むならば、戦術が一致し、基礎条件が一致する他の組織とのつながりを、繰り返し、それによって独自性を失うのではないつながりを、求めなければならない必要がある

てくる。反対に、書記局作成のこの提案をCNTが受け入れないならば、完全な復権運動のためにはきわめて有害な逸脱の危険を犯し、アナキストの不断の活動によって無政府主義を公然と表明し、宣言する中でみずからの印とした道德的革命的声価を失うことになるだろう」。

ちよつとした、しかしきわめて象徴的な事件がこの論争熱をかきたてた。それまで活動してきた全国委員会が、全体「CNTの滅亡の記録」である報告を公開して機能をストップしてしまったのである。ペスタニャに対してペイローは次のような抗議を投げつけた。

「これらのことがCNTの名を使ってなされたということを否定しようとする理由は何もない。球は雪の塊のように転っていくものだ。否定できるものならするがいい。しかし、いつか誰かが街の真中に立って叫ぶだろう。『この脱線を実行するためにCNTの名前と、連合の活動家』という形容詞は使えないということを君たちは否定する。私は肯定する、職業組合組織を促進し、調停委員会の受け入れを拒絶しているのは、同じく全国労働連合の全国委員会だったことを」。

ペイローに率いられた反撃によって、ペスタニャは全国委員会を辞職した。そして彼は、CNTの滅亡を宣伝する以外には自分の脱線行為を正当化するためのより恰好のいい手を見つけれなかった。——多くのもののうち——次のアルコイの「組合の幹部」のようなパンフレットは、そんな卑劣な手段に根拠がないことを明らかにしている。

「我々は、連合の総力を代表してはいないが、全国委員会の署名で『デスベルタッド』」第八号に公開された記録を拒否する権

利を有すると信じる。この委員会が連合の活動について語る、しかもその際連合の組織を無に帰せしめる如き危害を加えるという陰險な意図をもっているという前代未聞の大胆さを、我々は珍重する。

我々は委員会に対してなされるあらゆる憶測を防ぐために委員会に全権を委任するものである。しかし、そのメンバーが我々の力を落としめるような極端に行く権限は考えない。それ以上の活動の印を見せなかったとしても、委員会の地位の曖昧さによるものかどうか知るところでない。

我々はCNTに関与するすべての組織と活動家に勧告する。それらの断定の偽りであることを暴露していくように。それらは連合に守られる人々のためには何も語っていないのである」。

これらの事実、敗北主義者の不吉な予言や葬送の歌にもかかわらず、全国労働連合が常に代表した強力かつ巨大な運動を率直に示すだろう。

一九二九年暮れに、独裁制は転覆した。ここでは、それだけで独自の豊かな文学をなす政治的事件の詳細には触れない。前述したように、大衆に知られていない、しかもこれらの事件で決定的な働きをした要因の一つ、現代のすべてのスペイン政治家から継子扱いされるCNTを浮き彫りにしようという目的で書かれる本書の性質上、それが要求されるのである。

世界のいかなる国においても、いかなる政党によっても、再建運動にいくとも多くを費し、豊かな実りをあげた例は生まれなかった。独裁者失脚の数ヵ月後には、全国労働連合は非常なたくましさでスペイン全土に復活した。活動家の広大な基盤は活動力を目覚まし

強化して組合再建事業にかりたてられた。同時にスペインの首都や主要都市で新聞が現れ始めた。カタロニアの組織の地方機関紙「ソリダリダッド・オブレラ」がペイローに指揮されて登場したのは間もないことだった。彼はペスタニャや他の演説者とともに新劇場で開かれた第一回の集会に参加した。山のような群衆が劇場とパラレロ広場の空地を埋めつくした。ペスタニャはフライ・ルイス・レオンの生き生きした文章をもって演説を開始した、「昨日私たちは語っていた……」。連合はマルチネス・アニドからこのペスタニャまでの間死者として葬られていたが、今や不死鳥の神話を具現したのである。

ペレンゲルの「温和な独裁」は、すでに堰をきった人民のダイナミズムをおしとめようとして不可能なことをやっていた。囚人の特赦を、法の保障を、結社と言論の自由を叫んでいるのだ。支配者の不機嫌にもかかわらず事態は急迫する。CNTは悲観的予言者の見込み違いに抗して組合の再開を叫び、要求し、達成した。組織の中央が再開されるや労働者たちは竜巻のように流れ込んだ。そして、ほとんど休みなく労働者の復権の時代が始まった。独裁制はその腐敗と悲惨の事業を完成していた。七年近くストライキ権を蹂躪されていた労働者は賃金の引き上げと労働条件改善の闘争におどり出た。左翼及び中間の政治家は「わが時」至れりと労働者の復権を支援した。

これらすべての共同謀議に、CNTは市民と軍人を擁して参加した。その証拠が「サンファナ祭」とサンチェス・ゲラの攻撃だった。すべてこれらの運動は、独裁によって左遷されたか単に不満をもつ軍人との——紳士的——協定へ進ませた。軍人の苦境がどこに

あるかはすでに当時から明らかにすることができた。しかし、これらの共働は独裁に対してはそれほど決定的にはなされず、連合の戦術に危険な遺産を残した。

一九三〇年三月、「共和派協定」という題辞の下にバルセロナで出された政治的声明には、共和主義者の署名の間に数人のCNT活動家の名が見られた。

「共和派協定——現時点の体制の暴乱は保守的軍隊内部の最も高名なる人物の告白するところであるが、現在、カタロニアならびにスペイン全土の政治的・非政治的左翼の諸君には極めて重大な問題が提起されている。九月一三日の政変とともに始まった法律上の危機がいかにして終結するかを、未だ誰も知らない。しかし、国民をおおっている苦衷は国際的に知られるところとなり、貨幣価値の急激な下落の中にあって現状の破局的変更に直面し、行政手段の絶対的無能を我々は知る。ここに独裁の遺贈がある。道德的無秩序と経済的混乱が分ちがたく結びついている。

事態の現状、すでに死亡宣告を受けたことは周知のこととなっているところの——教養ある国民一般の間に早くも有力になった政治的成長の段階を示すものだが——刹那の命を長らえるために賭けようとする手段は、すべて時とともに危機を深め、分解の危険を増すだけである。

正常に復するには唯一の道しかない。人民主権の絶対不可侵と違反者の責任追及を内容とする法秩序の確立である。これを見もせず見ようともしないものは、歴史の証明済みの悲劇的無能力を国民に押しつけ、流血の混乱と恐るべき破局を様々に議論して、ごまかしの論理を支持するものだ、あたかも集团的愚劣と一国の

生命のゆるやかな死よりも大なるものがあるかの如く。さて、独裁の崩壊という事実そのものが、大変革の予告として昨日布告され、結局お粗末の一席としてけりがついたが、満足でないなら、我々の考えで高い理想をもつすべての人々の意見に従う。すなわち、この古ぼけた案山子、現在の不安定の最大の危険を徒らに糊塗しようとするでっち上げの危険、子供だましの脅迫をいっぺんにつぶすために。この態度を急遽決定するにあたって——それにもかかわらず、これらの事実によっても人物によっても欺瞞はあばかれていない、確かに——政党や組織にかまわず、今、市民という我々の条件を他のあらゆる皮相の資格に優先させ、我々の協定の価値をよく自覚して、こう宣言する。我々は最高要件たる正義に立ち、権力の乱用を決定的に阻止し、国民の前進に不可欠の法的ルートを通して国を導くところの政治の新秩序を確立するために、率先して働く用意がある。

この政治の新秩序、連邦共和制は次のような基本点に総合的に定義されるだろう。

1、権力の分離。2、全市民に対する個人的ならびに社会的権利の平等の承認。3、集団の意志を表明して結束した集団に対し、言語ならびに独自の文化発展の完全な自由を承認すること。4、思想と良心の自由、政教分離。5、大所有地の分割を含む農業改革。6、先進資本主義国の水準まで社会を改革すること。

この基本点で我々が一致すると宣言しても、誰も我々の固有の理想が衰えたとは思えないであろう。今日、絶対命令として我々に義務を命ずるものは、自由諸国民の潮流にスペインが率先して合流することなく最高の計画をたてる、という虚栄に痛ましくも

ス、ホセ・エクシラウ、J・L・ブフォル・フォント、J・ミアス、E・グラニエル・バレラ、C・コメロン、ベルナルド、エドモンド・イグレシアス、S・ヴァレンチ・カンブ、ペトロ・フォイクス』

一九三〇年四月一二日付『アクション・ソシアル・オブレラ』紙九二号にファン・ペイローの手記が出て、次のように書かれている。

「友よ。私が個人的に成した名声から身を引くことの不可能が、あの政治的声明の末尾に署名することを余儀なくさせた。私をそうさせた理由をここで明らかにしたい。というのは、他の事が私の行為を情状酌量するだろうから。これは決して私の望みではない。声明に署名したとき、私は明らかに自分の思想に矛盾していた。また、私の行動は、間違いであるにせよないにせよ、自己矛盾を承知の上で行なったことを認める。以前も今も純粹に個人的な行為と考えていることを正式に言明する。私の行為に従うよう誰かに影響を与えようとしたのだとは決して考えないでもらいたい。一個人が任意になした行為と考えてほしい。にもかかわらず、昨日私に届けられた声明は私の個人的行動が醜行で立派な誤りであるばかりか、私を超えた存在に反するという決定的な危険性をもつと言っている。それで、私は親愛なる人たちに危害を加えようとは決して望まなかったし、望んでもいないとしても、二つの道しか残されていないのだということを了解した。あの声明の最後の署名を撤回するか、私自身を孤立の中へ追放するか。

私は、署名するに至った理由をのべたが、それを撤回する何の

屈した最近数年の苦い経験である。よって、新憲法だけが、政治闘争の市民的発展を、文化及び公共の福祉の着実な増大と両立させることができるだろう。我々の歴史的使命に思いを致し、カタロニアならびにスペイン全土の善意ある人々に、民主共和国の建設に力を合わせるよう熱烈に呼びかける。これは、情勢の逼迫だけに規定された我々の言葉である。もし、我々の声が呼び求めんと願う誠意ある応えを見出さないならば、我々は、遺憾ながら我々の協定から解かれたものと考えざるであらう。だが、将来発生することについての責任は我々自身の上に課せられるであらう。——バルセロナ、一九三〇年三月——J・アイガデル・ミロ、J・アルサモラ、J・アレウ、ガブリエル・アロマル、アマデウ・アラガイ、A・ボラス、マルチ・バレラ、ヴィセンテ・ボテリヤ、B・ガバリエリア、R・カンパランス、F・カサス・サラ、J・カサネリヤス、ファン・カサノヴァス、P・コマス・クラヴェト、ルイス・コンパニイス、J・フロントホサ、E・カルボ、ヘラベルト、コンラド・ガルデオラ、オドン・ウルタド、J・ホベル、E・ライレト、J・リュウリ・ヴァレスカ、A・ムンタネル、ルイス・モンタニャ、J・モソレス、J・マテウ、A・モラス・カウベト、J・ムルトラ、L・マルチネス、マルフル、J・M・マシプ、L・ニコラウ・ドルウェル、ファン・オルス、J・ペイロー、E・B・デ・ケロス、C・ロフェス、A・ロカ、A・ロヴィイラ・ヴィルヒリ、アンヘル・サンブランカト、M・セラ・イ・モレト、カルロス・ソルデヴィラ、D・トリリエス、T・ツソ、S・ヴィダル、A・ヴェリリヤ、J・ヴィアデヌ、J・ヴィラドマト、A・ヴィラルタ・ヴィタル、ファン・B・ヴィグエ

動機も見出せない。私の行為に愚かな点があるとしても、署名撤回は苦境にあるからといって私に要求されるものではないのだから。従って、私に残された唯一の道は、あるとすれば、私のその愚行に対して我が身を捨てて償うことである。

それゆえ声明する。私は、私にとって犠牲になるだろうものに対してあらゆる危険を避けるために、組織と思想界と新聞において、従って我々の方針を指導する前衛に黙従している多数の中にあってより大なる一人として過ごし、展開してきた全活動を停止する。

私の行為は最も直接的な意図と最も絶対的な無私の所産だとみずから信じている。だが、もしそこで愚しさがあったのなら、適当な道徳的制裁を課するのが正当である。いずれにせよ、私は自分ですすんでそうするつもりだ。他の人々の良心に従うなら、正しく適切に評された場合、制裁は撤回されるのが妥当なのだが』

この一件はペイローの複雑な心理に非常に似つかわしいものなのだが、同時にその時代の一つのあらわれである。左翼の組合人や政治家は、前者の願望が革命的目標に関してはより野心的だったとしてもそんなに重大ではないのだが、独裁者打倒の共通の願望によって連帯を見出した。共に謀議に加わり、共に敗退の憂目を見た。かかる情況の戦友関係は厳しい独裁下では連合のある分子を協定からそんなに遠くまで進ませることはなかったが、CNTを操作しようとする、あるいは少くとも一政党に変えようとするか議会の仕事に専心させようとする根強い幻想を政治家間に抱かせた。そして、CNTが自力を発揮できる限度内で未来の代議士や大臣を激励したり媚びたりするということが、組織の中でも著名な上層部の上に広が

った。

ペイローの結論は、ホセ・ヴィリヤヴェルデに導かれた時期に、ヴィゴの「デスベルタッド」に次のような解釈を吹き込んだ。

「誤りについて考慮する必要はない。我々にはこれは解釈の問題だと思えるのだ。ペイローは、我々の生きている歴史的現実を解釈するに当って、あのように行動して良心で成し遂げうると信じている。だが、ほとんど確実に、ペイローの精神では自己を否定するからその素振りも表われないだろう。万一そう考えているのなら、今日と極めてよく似た情況でメリヤが言った言葉を彼に想起させよう。」

それはロシア革命の初めの頃だった。アストゥリアスへの旅行から私が帰ったとき、メリヤは数人の同志と彼らの全活動とに關して尋ねた。ある者について、多分メリヤと最も親しいものの一人だったのだろう、彼が、話によると、組合は革命の味方として利用するために議会に代表を送るよう、という考えを表明したことを我々は知らせた。これを聞いてメリヤは言った。「アストゥリアスに帰ったら彼によろしく伝えてくれ。そして、好都合だと判断したら、私のようにやってくれと言って欲しい。私は活動しない。我々が表明した理想を広めるためにすでに相当数の青年たちがいるから。しかし、決して自分の過去を否定しないように、と」

これがペイローのことではないとしても、非常によく似ている。彼と我々を結んでいる友愛という名においてだけ、彼は何度も本紙の紙面、簡単なこれらの事項を尊重したというのだ。もし同志ペイローが自己を遇する誠実さをもって、署名が「愚行」であり

『立派な誤り』であると認めるなら、『共和派協定』の声明からその名前を取り下げるべきなのだ。彼自身認めるように、誤りがあったのなら、なぜその誤りに固執するのか？ 裁きを受けるために公然と胸を開いた彼がもし誤りを認めるなら、何も咎めるべきはない。だが、説明されない過度の自己愛から誤りに固執するなら、署名不撤回はそれと同じことなのだが、実際ペイローが我と同じように感じていても、CNTの代表としての責任からは解かれて生きるべきである。』

王制の打倒と第二共和国の宣言を準備したこれら政治的諸事件にCNTが参加した過程は、一九三一年の連合会議で全国委員会の通達を検討するために計画された論争で、完全な輪郭が整えられていた。委員に委任されている交渉と仮協定をめぐる大多数の真剣な批判は、ファン・ペイローの興味ある介入をもたらした。それについて、当時の主要な政治的事件に投げかけられた光に照らして、次に大要を述べよう。

「私はもはや次のように肯定するための言葉を失った。一九二三年以後、一つの全国委員会、一つの地方委員会すら、共和国を確立するためでなく、我々すべてを窒息させていた汚辱の体制を亡ぼすために、政治的分子たちとの接触を保ったりはしなかった、と。独裁制が確立したとき、セヴィリヤに召集された全国委員会はなすべき事を知らなかった。ただ一つ知っていたことは、一九二三年か一九二四年初めかに、連合の分子が、たしか正式代表であることを誇示していたと思うが、フランスの町フォン・ロミューでマシア（フランス共産党のマシア大佐。エスケーラ党の指導者。リヴズゴラ独裁時代、フランスにいた。）と会うことだった。そしてマシアはその党を代表していたのみならず、代表し

ていたとすればスペインの他の左派をも代表していた。……それ以来、政治的分子たちとの間にほとんどわからないような關係が結ばれた。……一九二四年の中頃、カタロニアの地方委員会がマタロにあり、全国委員会がサラゴサにあったとき、マシアの方から、連合の代表部は革命的動きに対する観察と連絡を確保するためにパリに移るということが要求された。カタロニア地方委員会は全国委員会と暗黙の取り決めを行なって、諸君と他の同志に今語りかけている私を指名した。マシアは、彼の党の代表である上に他の左派の代表も兼ねていてと言った。そして、連邦共和国の確立を目指す革命運動を支援するために連合が要求している条件を我々にたずねた。連合側の代表（ペイロー自身のこと）の回答。『我

我は、実現されつつある革命の後に來たるべきものについてはほとんど関心をもたない。我々が関心をもつことは、いかなる例外もなしに我々の逮捕された者すべての釈放と、社会的・個人的自由の全面的保証とである。これがもし与えられるならば、我々は他のいかなる条件をももち出す必要はない。』だがこれは原則的な意見の一致である。この代表（ペイロー）が帰ると、連合は地方大会を召集した。この大会は、事実報告の後、ほとんど満場一致で、連合が革命運動に参加する用意をすべきであるということを採用した。七月には全国大会が開かれて、同じく満場一致で、革命運動に参加するという提案が採択された。このことは、大会がこれに責任を負うようになった時以後、組織全体に責任が加ふることになったことを意味する。しかし、当初、我々は六カ月の猶予期間を与えた。ところが、満期になる前に、マシアが意図したところは国民運動ではなくてカタロニアだけに限られていたこ

とを我々は知った。そのとき、全国委員会は別の大会をバルセロナに召集した。一九二四年一〇月だった。そこで連合の代表の側からマシアとの協定破棄の提案がなされた。だが大会は、もし十分ならその日からさらに猶予期間を新しく置くのがいいと考えた。従って、全体の意志は政治家たちとの協定維持の責任を果たすということだった。

他の件に移ろう。一九二八年にサンチェス・ゲラと結ばれた協定。私は全国委員会の書記だった。全国委員会は政治的分子たちとは共働しいつもりだった。しかし、同大会では、アナキストグループ及び連合の分子たちで構成されたいくつかの活動委員会が任命されることになった。混成の活動委員会だった。全国委員会が政治的分子たちとの交渉の開始を極力抑えている間に、活動委員会の方はこれら政治的分子及び軍人と深い關係を結んでいた。そして、パリにいたサンチェス・ゲラが代表権をもたない一同志を呼び、かれは単なる個人としてパリに赴いた。この同志は、パリから帰ると、全国委員会でもなく、かく言う私を呼んで、パリで起きたことを強制した。そして、連合と、あるいは連合なしで実現されるだろう革命の逼迫に直面して、当然我々は決断すべきであると言われた。そのとき、この革命運動の逼迫を前にして、連合がこの運動を推進するべきであると考えた全国委員会は、原則としてパリとの關係を保つこと、同志ブルノ・カレラを計画に通曉させるために指名することを了承した。一方、委員会は政治家と協定しなかったので、全国大会を召集して我々の責任を回避することができる、またその大会があらゆる場合の責任を負うだろうと考えた。全国大会は一九二八年七月二九日に開かれ

た。同大会は、カスティリヤの代表も含めて満場一致で政治的分子及び軍人たちの契約を取り決めることに一致した。そこで、軍人及び政治的分子たちが革命を行ない、我々が革命を支援することに合意した。そして、もし政治的分子たちが達しうる以上のところに連合が達する可能性をもっているならば続行するし、もっていないならば我々は平穩にすませることにした。

一月のクーデターは連合に何の予告もなしに行なわれたので、八時間の予告期間において、我々は提出された問題をもってバルセロナに会合した。日曜日に我々はこの言われた。「明日には運動が始まっている。」そこで全国委員会は同志を呼んで必要な準備をした。合意によれば、CNTは街頭に軍人及び砲兵隊が現われるまでは動かないということだったので、我々の兵力で街頭に出よと言ってきたとき、我々の要求は果たされていなかったわけだから、ノーと答えた。

私は承認したいし喜んでそうする。政治家との交渉が続けられるのなら、政治的分子たちとの接触を持つと連合に提起したからといって、FAIだけ、あるいはアナキストグループだけを非難することはできないということを。判明していることは、上述の同志に代表されており、かつ代表されていると言われたFAIの名によって語られたということである。しかし、今、FAIはこれらの人物を解任したので、この事情を明らかに説明できなくともFAIは正当だと考えねばならない。アリンの言うとおり、あの時には全国委員会はFAIの代表者だというそれらの人物によって、政治的分子たちと接触を持たざるをえなくされていたのだ。

ある時、アルファラチェを呼んでこう言わなければならなかった。「もしここで全国的な革命運動のことをとり上げねばならぬとしたら君たちは全国委員会と同様、どんな委員会だろうがFAIだろうが連合の代表権を奪いはしないのだと認めてはならない。君たちは、そこへ行かなければならないが、君たちの利益になることのための儀礼的な出席である。」

こうして名高いサン・セバスチャンの協定に達した。政治家たちがサン・セバスチャンに会合したとき、連合はまだ政治的分子たちと全然接触をもっていなかった。FAIですら、軍人としての関係のないFAIの代表だと称せられる分子たち以外は、そういう政治的分子たちとは接触をもっていなかった。サン・セバスチャン協定には連合は何ら介入するところなかった。UGTが呼びかけを受けなかったと同じく、連合も呼びかけを受けなかった。一度だけ、街頭で進められるべき革命運動へCNTとともにUGTも呼びかけられたとき、一致したことがあった。

一点明らかにしなければならない。その政治家たちの性質を示すものだからだ。彼らはCNTとはいかなる協定もしないことを強く望んでいた。CNTは義務の分担に基づいて契約を結ばなければならず、義務の一つは人民の武装を提案することにちがいないと知っていたから。その上、CNTは基本的目標を追及されまいとして、書類では協定を結ぼうとしなかった。

サン・セバスチャンで協定を結んだ分子たちは、CNT及び社会党と一致して会合するとしても、連合が参加しないように用心した。権限外の、あるいは非公式な代表権を利用したかったのだ。ちょうどそのとき、これら政治家が連合と正式に了解せず

革命運動に駆り出そうとする策略に気づいて、「ソリダリダッド・オブレラ」は彼らに対して次のように言った。我々をその他多勢だと考えるなら間違いである。革命は連合によってなされるか、さもなければなされぬか、だろうと。

そして、二人の左派の代表に命じて、現在の内務大臣、当時の警視總監ガラルサ氏のもとに送った。彼らに要求された第一のことは、かく言う私とマソニとの協定に達することだった。私はどこも代表していなかったで行くのを止められた。が、同志マソニと他の同志は、その二人が何を望んでいるか調べるために会いに行くよう主張した。だが、彼らは連合と関係をもつことしか望んでいなかったのだ。マソニと私は代表権をもっていなかったし、全国委員会はバルセロナにあったので、翌日我々は全国委員会に入るようにした。そこで、あったことを説明した。全国委員会と地方委員会が彼らと談合した。原則的に協定が成立した。しかし、全国委員会は協定を結ぶ権利をもっていると考えられなかったので全国大会を召集した。マラウ、ガラルサ、マソニ及び私の会見は一月一九日に行なわれ、組織にはかるための全国大会は一月一五日に開かれた。そこで、東部地方の代表以外は、革命運動を行うために政治的分子たちと協定を結ぶことに一致した。

この後、責任があるとしても委員会に負わせてはならない。この協定を結ぶことに同意したものの全体に負わせるべきだ。

私としては選挙を利用する政治家を常に批判していた。なぜなら、それは経済的・政治的・社会的な内容をもつ革命の可能性を殺すことだから。つまり、革命の基盤そのものを破壊することだから。

私は事実がすべてCNTの原則からの逸脱だったことを認める。しかし、陰謀や革命の準備やあの独裁を倒す強力な活動のような世界にいらなければならない、一九二三年から一九三一年までの間、全国労働連合はどこにいたのだろうか？

私は大根役者が拍手をもらおうとして「先生万歳！」と叫ぶようなことをいうのではない。私が言うのは、いつも政治家たちと交渉せねばならなかった、いつも、連合の発展の基礎である我々の出版の自由と個人的社会的自由の保証を求めていた、ということだ。私は、ここで、我々が達したところに達するためではなくそれ以上の何かに達するために、個人的に弁論した。私は、一九二四年にすでに言っていたのだが、誠意をもって言う。連合は独自の運動を行う準備ができていなかったと思う。こういう時に独自の運動を、社会革命をやるうとしても失敗しただろう。また、今我々はその条件の下にないのだから、今後その革命を行うために準備をしなければならない。これまでは少数の同志が自由を得たにすぎない。私はそんな小さな最低限しか得なかったことに不満なのだ。少数の同志が街頭に出るのを許されただけなのだ。一人の代表は言う。ペイローはCNTの活動の乏しい経歴の中でバルセロナ知事の宣言に関するいきさつを忘れた、と。

バルセロナ知事が、全国労働連合が与えた三ヶ月の信頼に外れたことを言ったのは確かだ。忘れていたことがある。一九二八年に我々が全国委員会の職務を選んだとき、バルセロナには革命委員会が活動していて、そこに連合の代表がいた。その委員会で、政治家たちは、カタロニア地方連合の代表に、革命が行われた場

合には連合側として三ヶ月でなく六ヶ月の平静を守るよう要求すると言った。そうして一九二八年六月二十九日の大会でサンチェス・ゲラとの協定が成立したのだが、地方委員会の代表は政治的分子たちの要求するところに対して疑問をさしはさんだ。そこで連合を代表するべき代表に言われたことは、いかなる書類にも絶対に署名しない、なぜなら我々の望むところは革命運動を創り出すことである。しかる後に情況のもたらすところに従って連合は活動するであらう、ということだった。……この声明がある会見で出されたことは諸君も知っているし、そこに出席していたビルバオの同志がよく知っている。我々に言われたことは、六ヶ月の終るまで社会秩序を危険にさらさないということについて確かな合意はあったが、協定はなかった、ということだ。しかし、書類の協定については何も話されなかった。このことをコンパニイスは非常にあいまいに言っている。

ペスタニャ。——いかなる組織も地域委員会も地方委員会も全国委員会も協定を獲得しなかった。暗黙の協定がなされるために政治家たちの請願があったただだ。その中の一つは実際になされた。確実だったのなら次のようなことは起きなかっただろう。共和国は一四日に宣言された。バルセロナの靴職人は紛争を計画していた。共和国は宣言され、工場主は譲歩せず、ストライキは指示を全く受けないで続いた。もし協定があったのなら、この紛争の継続の責任が我々にあると政治家たちがつめ寄るようなことはなかったのではないか？」

■投稿の規程

『黒の手帖』発刊のねらいの一つは、新鮮で大胆な未知のライターを発掘し、彼に発表の舞台を提供することにある。

われわれが求めるのは、いまジャーナリズムに氾濫しているような、器用な思想解説の論文ではない。レトリックでだけばしく飾られ、その巧みさで読ませるようなエッセイでもない。それはそれなりの用途をもっているだろうが、われわれの注文はそんなものではない。

自分自身のなかからしばらくだしたエキスで綴られた文章、自己の現実をストリートに文字化していったような評論、われわれはそういう腰の入った投稿を期待している。テーマは特に限定しない。自分の声がそこに響いているようなものがほしいのだ。

■しめきり日／とくに設けない。

■枚数／とくに限定しない。ただし四〇〇字一〇枚以上一〇〇枚以内がのぞましい。五〇枚以上の場合は連載になることがある。

■原稿料／なし。ただし掲載号を五部贈呈する。

■原則として原稿は返却しない。とくに返却を希望される場合は返信料を同封されたい。掲載した場合は返信料はお返しする。

■送り先／東京都新宿区北山伏町三三（大沢方）黒の手帖社